ひとりごと

牧野信一

青空文庫

（十月十六日）

＊

きのふ、おとゝひ、さきおとゝひ――と、あゝ、何といふ浅ましさであらう、嫌はれ、軽蔑され、憎がられて、ウマクもない酒をのんでの気違騒ぎ、あゝ、もう厭だ、断然、酒は御免だ。ペンを執らうにも、体全体がガタ〳〵とふるへてゐて、一向に埒はあかぬ。

メフイストフエレス「先づ第一に飲助達に御紹介申しませう。さうするとあなたは必ず此世は大変簡単に渡られるものだといふ合点がゆくに違ひない。奴等と来たら毎日毎日お祭り騒ぎの大浮れで、恰も猫が自分の尻尾に戯れまはるかのやうに、少しばかりの頓智に自惚れて狭いところをぐる〳〵廻つて居るのです。訴へるほどの頭痛でもない限り、酒場の亭主に信用のある限りは、何の苦労もなくあゝした態の大浮れです。」

これはメフイストがフアウストに酒場の学生を紹介する野暮な科白であるが、俺は失敗してはならないと思ふ酒の場合には、そつとこいつを思ひ出して要心するのだが、うつかりと、また大失敗を演じてしまつた。凡そ俺は知る限りの酒客の中で斯んな科白を投げられて適当と思ふ人物を発見したためしはないのであるが、たつたひとり俺だけは、この言葉に厭といふほど

打ちのめされる思ひがするのが常例なのだ。あの時酒場のジーベルやアルトマイエルは、メフイストの科白に憤慨をして決闘を申し込んだが、俺にはそんな生気が皆無で、後悔と憂鬱ばかりなんだから悲惨だ。俺も盃を執つて以来、指折り数えて見れば、はや十余年、――嫌はれ、軽蔑され、憎がられて十余年、友達に、恋人に、そして親に――。

これはどうも常規を脱して俺は俺の酒を罵つてばかりゐるが、そして白面の俺に好意をもつても誰ひとりとして俺の酔態を許した者とてもなかつたところが、あの「自然と純粋」の著者は、――余は寧ろ君の酔態に好感を持つ云々といふやうなことを云つて俺を驚かせた。あれには俺は、ほんとうに驚いてしまつた。何故なら、あいつと来たら就中俺の酔態などといふものは顰しゆくしさうな、一見すると、内に（顔や姿を云ふに非ず）モーゼのやうな厳しさを持つかのやうな犯しがたい紳士なのだから――。俺は、唖然とした。こいつは、どうも、この男の前ではうつかり酔へぬぞ――と返つて俺はさう思つて、あぶなくなりさうになると秘かに自分に向つて俺はメフイストの呪文を呟いだものだ。勿論、要心したからと云つて、綺麗な酔漢になれるような俺ではない。酔つた〳〵、しどけなく酔つて、大いに彼に厄介をかけつゞけた。いつもしどけなく酔つた俺を坂の上にある俺の館までおくりとゞけて呉れた。そして俺の酔態に対して一言のひなんも浴せた験しがない――それは何も彼にとつては俺に限つたわけではないのだが、俺には未曾有な経験だ。悲しみも弁へ憂慮も知り、そして春の波のやうに長閑な感情に豊かなあの秀才が、陋ろうの酒も厭はず、醇々として芸術の道に遊びつゝある風情は、昔

々、今日はローマの高殿でハンガリアのトカエル酒に、酔ふて月をうたひ明日はピザの露路裏で密造のドブロクに酔ひ痴れた友と共に遠征の覇気を養ふたマーク・アントニーの颯爽たる有様が忍ばれるやうだ。アントニーの酒に就いての挿話を批評したいが、俺はゆうべの酒が苦しくて、どうにもやりきれないから省いてしまふ。ともかく俺は、もう〳〵一切断酒だ。「自然と純粋」の著者にも、このところ数ヶ月会はないが、彼と共に盃を執つた翌日には決して俺に斯んな焦慮が起つたためしのなかつたことを今更のやうに思ひ出した。

この夏の頃、この本の巻末に載せられるといふ筈であつた「河上徹太郎の印象」といふものを少しばかり書きかけて、間に合はなかつたのだが、それをまとめるには大分の時間を要するので、いづれ完結しようと思つてゐる。こんな不体裁なものをおくる位ひなら、未完のそれでもをと思つたのであるが、それは、やはり完成の上にしたいと考へ直した。

＊

次の一節は、今、これを誌す前に、書きかけて、反古にしようとしたものであるが、何故、反古にしようとしたのかわからなくなつたので、また附け足したのである。

＊

或夜私たちは、アザミさん、アザミさん、と叫びながら美しいアザミさんの行衛を追ひ求めてゐました。尤も私だけが一番さかんな声を挙げてゐたのですが――。アザミさんは四五日前にG・R（酒場）へ移りましたよ、と私たちがたどりついた酒場で云はれましたので、それつ！　とばかりに、雨をおかして私たちはG・Rへ走りました。アザミさんは二三日前にXへ変りましたよ、とG・Rで教はつたので、更に私たちがXへ向ふと、あゝ、あのひとはきのふからパントムで働いて居りますよ。――ところが、パントムといふ酒場のありかが、一向に見当がつかないぢやありませんか。西銀座の裏通りです。私たちは二手にも三手にもわかれて、パントムのあかりを探しまはるのですが、次の街角で落胆の顔だけが出合ふばかりでした。そして口々に、これほど探しても解らないのではあきらめるより他はない、折角の酔が醒めてしまふよ、止めよう〳〵と云ひ出されて、私だけが悲しくなつてゐたところ、不図うしろを振り返つて見ると、向方からこうもり傘を構へて、ゆつたりとしたあしどりで雨の中を歩いて来る私たちの一人の伴れを見出しました。私たちばかりが先へ立つて騒いでゐるので、とうに帰つてしまつたかと思つてゐたのです。私は意外に思ひました。で私は、彼に近づいて、これ〳〵の状態となつて皆な疲れてしまつたから別のところへ引きあげようといふやうなことを申しますと、無論、私たちのやうにはしやいだりしてゐない何となくおとなし気な顔の彼のことでありますから、即坐に賛同するであらうと見ると、彼は恰もうらゝかな春霞を眺めてゐるやうな陶

然の眼(まなこ)を徐ろに視開いて——いや、探さう、是非ともパントムなるうちを探してアザミさんとやらに会いたい！　と、飽くまでも真面目気な歌舞伎の大名のやうな声で唸ると、ぬつと雨の中に立ちはだかりました。私は大変に酔つてゐて、今思ひ直してもあの時の他の大学生が誰であつたか決してわからないのでありますが、雨にぬれた音や赤の光りの中に重々しく立ちどまつて、むかふを眺めてゐる彼の姿が、はつきりと印象されました。それは此度びの「自然と純粋」の著者でありました。そこで再び元気づいた私達は皆なで肩を組んで、その通りを無暗と先へ進み、突きあたるとひとりでに右に曲る露路をまはつて、出たら目に歩いて行くと、偶然にも薄暗い横丁の隅に、バア・パントムの「明るい」かんばんを発見しました。私達はハイデルベルヒの書生さんのやうな大騒ぎで地下室の酒場へ駆け込むと同時に更に、漸く発見したアザミさんを、とりかこんで花々しい乾盃を挙げました。——ところが、アザミさんよ、俺たちが今、君を見つけることが出来て、こんなにはしやいでゐるけれど、ついさつき皆なもう厭になつてしまつて別れてしまひさうになつたところで、ひとり我ん張つて、そのおかげで、君に遇へたのだが、その大いに先見の明のあつた感謝すべき男といふのは、それ、そこに居る、一番おとなしい、この男だよ——と私は、騒ぎの中からアザミさんを伴れ出して、静かに此方の騒ぎを見物してゐた彼にひき合せました。するとアザミさんは、彼の様子をしげしげと打ち眺めながら、ロココ風に見ゆるしなをつくつて彼の傍らにすゝみました。

それからといふものアザミさんは彼になみなみならぬ好意を寄せるようになつてしまつて、

私などがひとりで出かけて行つても、彼のことばかりを話材にしたがつて、折さへあれば怪しからぬ想ひのたけを打ちあけようと身構えてゐる私には一向無頓着になつて了つたのです。彼女は、彼のことばかりを、妾はあゝいふ人が好きだとか、たのもしさうな方だとかなどゝ云ふばかりで、つまり私はその反対の人物として扱はれ、卑俗な言葉で云ふならば、彼のおかげでまんまと私は振られてしまつたのです。その後彼はパントムへ行つたか何うか知りません。私も口惜しかつたので、アザミさんの話は彼にも誰にもそれ以来ぷつつりと口を閉ぢてしまひました。――つい先日アザミさんが結婚先から寄した手紙の中にも、彼の動静に関する質問の個所を私は見出しましたが、未だ返事も出しません。

（下略）

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第五巻」筑摩書房
2002（平成14）年7月20日初版第1刷
底本の親本：「作品　第三巻第十一号（十一月号）」作品社
1932（昭和7）年11月1日発行
初出：「作品　第三巻第十一号（十一月号）」作品社
1932（昭和7）年11月1日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：宮元淳一
校正：門田裕志
2011年8月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひとりごと

牧野信一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/